Japanese Association for Religious Studies

修験道系柱松行事の行われる場

由谷　裕哉

柱松とは木の幹・枝などを縛って柱状に立てた祭具のことで、夏の盆の頃に何らかの霊魂を迎える意味づけでそれを燃やす場合と、近世などに修験者がその点火に関与した場合とがある。報告者は本学会の二〇〇五年度および二〇一〇年度大会において、仮に「修験道系柱松」と称する後者について、戸隠・妙高・小菅の事例について報告を行ってきた（要旨は『宗教研究』七九巻四号および八四巻四号）。

今回は、新潟県妙高市の関山神社火祭りにおける柱松行事に関して、旧・関山権現の別当であった宝蔵院に関する『宝蔵院日記』の翻刻が全三巻で昨年完結したことにより、一九世紀における妙高の柱松行事に接近しやすくなったこと、および本年七月二八日に戸隠神社において復興して四回目の柱松神事が挙行されたこととを併せ、近世の妙高と戸隠における修験道系柱松行事を再定位したいという趣旨の報告である。

妙高については、完結した『宝蔵院日記』翻刻本によると、一九世紀に入り関山権現の別当宝蔵院が夏季祭礼時に権現社殿へ昇殿する作法が、一八世紀に比べて入念になったこと、寛政八年（一七九六）から祭礼に「先達」という役職が登場し、一九世紀に入ると信州の大聖院という修験がほぼ幕末までその役を担ったこと、などが明らかになった。

一方で復興した戸隠神社の柱松神事は、神社役員など有志によって二〇〇三年に復興し、それから三年毎に行われるようになったもので、復活に当たっては『戸隠祭礼図巻』『善光寺道名所図会』や『三所大権現祭礼之次第』など近世史料の他、スタッフが妙高および小菅神社（長野県飯山市）の柱松行事を見学した知見が生かされているとのことである。そのためか、近世に戸隠で行われていたとは思えない入出峰が儀礼的に再現されたり、「松山伏」が入峰している間に「験比べ」が行われ、その二演目の一として近世戸隠権現の夏季祭礼で行われたとは考えられない湯立てが実演されるなど、奇妙な部分もあった。

しかし、この「験比べ」のもう一つの演目として行われた「三剣の舞」が『戸隠祭礼図巻』における長刀による試闘に対応すると主催者側が位置づけているので、権現社殿での仏事―長刀―柱松への点火という同図巻に見られる祭礼の三段階が再現されたことになる（なお、仏事は拝殿内での神事で代行）。さらに、この三段階の再現された場所が、それぞれ戸隠中社拝殿―広庭から石段で三段ほど上の、鳥居から拝殿よりのスペース―中社バス停そばの広庭という三つの祭場であり、標高の高い方から低い方へ、拝殿の中から遠方へ、という位置関係である。これらの祭場が近世戸隠中院における柱松行事の実態を反映していると仮定すれば、こうした祭場の移動は妙高関山の柱松行事と全く一致する。

戸隠の場合、関山に見られた別当寺院から権現社殿までの行列が史料の上でも復興した祭礼にも見られないが、それ以外の次第は、神輿渡御がないことを含めて類似していることを報告者はかつて指摘していた（『関山神社火祭り調査報告書』妙高市教育委員会、二〇〇六年）。復興した戸隠の柱松神事を今回拝見し、柱松行事に関わる祭場の位置関係も、両者はきわめて

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

近似していることが明らかとなった。

とはいえ、近世関山権現の柱松行事は六月一七日、戸隠中院のそれは七月八日と、祭日にはかなり隔たりがある。修験道系柱松行事を入出峰の験競べと意味づける五来重の説を想起すれば、両者とも近世に峰入りが行われなかったか、あるいは柱松行事が元々それと無関係であったことに起因するのではないだろうか。

木曽三川十六輪中における灌漑用の自噴井と水神

下本英津子

本発表では、濃尾平野の木曽三川流域に位置する十六輪中で灌漑用に使用された自噴井をとりあげる。輪中という環境において自噴井がどのように利用されていたのか、そして自噴井を利用する上でどのようなしきたりを持っていたのかについて考察する。

輪中とは、洪水から集落や耕地を守るために輪形堤防で囲った居住形態を言う。木曽川、長良川、揖斐川の三川が流れる濃尾平野西部において発達した。輪中の課題の一つは、輪形堤防で外水を防ぎながら、どのように水を得て排水するか、という点にある。稲作が生業の中心であった輪中地域では、灌漑用水の取排水が課題となった。

十六輪中は、揖斐川支流沿いにある小規模な輪中であり、輪中分布域では最北西部に位置する。灌漑取水源は、河川、地下水、隣接集落からの排水、の三種あった。そのうち地下水を利用した自噴井は、昭和三〇年代まで盛んに利用されていた。自噴井とは、水を通さない難透水層に蓋をされた被圧地下水が地上まで噴出する井戸を言う。十六輪中は、扇状地末端部に近いため地下水が地表に近い。輪中内のどこで掘っても自噴の水が湧いた。

自噴井は、年間を通して湧き続ける。ただし日照りが続くと水量が減り、逆に大雨が続くと水量が増す。輪中内の其処此処で湧き続けるため、井戸の数があまりに多いと輪中内部の水が排水できずに溢れる「内水氾濫」の危険性が増すことになる。

井戸跡と聞取り調査によれば、昭和三〇年頃には十六輪中内で二四個の自噴井があった。自噴井が設けられた場所は、①標高がやや高く水がかかりにくい場所、②取水口や水路から離れ水が来るのが遅い場所、③苗場など安定的に供給できる水が必要な場所、である。

十六輪中の自噴井の形状は、深さ一四～一五メートル、直径一五センチメートル程であった。水管にはかつて竹が用いられたが、後にビニール管が普及した。井戸を管理するのはそれぞれの持ち主であった。井戸水は低温のため、畔を長く作る工夫をした。また水が必要ないときには、ぼろ布や藁束を井戸口に詰め、水を止めた。

井戸を掘る時は、井戸を掘る家の主人と家族が手伝いながら、井戸屋を中心にして掘った。掘るのには一週間程度かかった。丸太の支柱から鉄の棒を垂らし、ロープで引いては離すことを繰り返し、地面を叩いて掘り進んだ。

自噴井には、水神様のしきたりがあった。井戸を掘る前には、塩や神酒を供えて水神様をお祀りした。また井戸を埋める

NII-Electronic Library Service